

聞き手行動における言い淀みの役割の日英比較分析

吉田悦子

三重大学人文学部

tantan@human.mie-u.ac.jp

Robin Lickley

Queen Margaret University (UK)

RLickley@qmu.ac.uk

1. はじめに

本稿では、日英語の地図課題対話において観察された発話から、聞き手行動における言い淀みに注目し、その対話進行上の役割を考察する。言い淀みは発話の冒頭で頻出し、新しい談話要素の導入に伴い、話し手が聞き手の注意を新しい要素に向けさせる動機付けとして機能していることが指摘されている。こうした言い淀みは、話し手主導型であり、話権保持の傾向が強いのにに対し、聞き手行動における言い淀みは対話の進行に貢献していることを主張する。さらに、この聞き手行動における言い淀みを話し手への反応としてなされる「聞き手的行動タイプ」と話者交替を意図する「話し手指向タイプ」とに分けて日英比較し、対話遂行上、どんな方略として働いているかを考察する。

まず、2で対話、基盤化、言い淀みの談話プロセスを結びつけるための試みを提示する。3で対話データと分析方法について述べ、4で事例を分析する。

2. 対話、基盤化 (グラウンディング)、言い淀みの談話プロセス

対話は、複数の対話者が、基本的には対面で情報交換をおこなう相互作用的なことばのやりとりである。対話の動機付けはさまざまであるが、その目的は、お互いに共有できる背景的な知識をもとにした共通の基盤 (common ground) を築きながら、コミュニケーション活動を成功させることである。このように対話の関与者同士で共通の基盤を形成することをグラウンディング (基盤化) と呼ぶ (Brennan and Clark 1996)。

吉田・Lickley (2009) および Yoshida (2009) では、対話においてどんな基盤化過程が対話の進行に影響を及ぼすのかを推定するために、言い淀みが特定の対話プロセスにおいて果たす役割に注目し、日本語の対話コーパスに見られる言い淀みをタイプ別に考察した。まず、基盤化が形成される談話の段階として、吉田・Lickley (2009)では、新しい談話要素

を導入しようとする発話の段階において言い淀みが共起する現象に着目した。たとえば、まだ対話者間で共有されていない地図上に描かれたなじみのない目標物を新しい談話要素として談話に導入する場合を想定してみよう。おそらく、対話者が最初にすべきことはその目標物に名前をつけて導入し、対象を同定することであろう。このような場合、すでに名前が自明の対象を談話に導入する作業と比べると当然、困難さを伴い、言い淀みが多くなることが予測される。

たとえば、Arnold (2008) は談話において新しい談話要素が導入される場合に言い淀みを伴うと、聞き手はその言い淀みを通してその指示対象への接近可能性を高める傾向があることを指摘している (508)。つまり、対象がなじみのない複雑な形状をした、ありふれた名前をもたない事物であれば、それに伴う言い淀みは、聞き手に談話要素を同定することを促し、注意に向けさせるための手がかりとして働いているのではないかと考えられるのである。

Yoshida (2009) における分析では、形式的な分類に基づき、談話要素を導入する談話段階とそれらが定着する段階とを比較すると、それぞれ異なるタイプの言い淀みが使用されていることがわかった。しかしながら、どんなタイプの言い淀みが、どんな談話の段階や状況で生じやすいのか、そして言い淀みが対話プロセスや発話者間の協同作業に及ぼす役割についてはまだ未解決である。中でもこの言い淀みが聞き手に及ぼす影響について次の節で検討してみる。

3. 対話における言い淀みの特徴

Lickley (2009) の分析では、言い淀みが対話において独話よりも頻度が高いのは、対話者同士の相互行為が発話に影響を与えるからだとして主張する。その影響には直接的影響と、間接的影響が考えられる。直接的な影響とは、相手の対話者が介入するために脅かされる話権をめぐるものである。その結果、話し

手は反復 (e.g. *the the white mountain*) や間延びによって話権を維持しようとしたり、話順を相手に譲って発話を中断したりすることがあげられる。これらは発話中の話し手にかかわる局所的な影響といえる。

一方、間接的な影響とは、対話の目的を達成するために、対話者はお互いの知識や情報を総動員して基盤化過程を維持しようとするところから、談話のさまざまな段階で協同的な相互作用として言い淀みが生じるというものである。地図課題対話では、それぞれに共有している情報 (地図上の目標物や名前の共有) が少しずつ異なるため、その情報の共有が課題となる。その場合、話し手は自分の話順を維持しようとして生じる話し手指向的な言い淀み (e.g. *self-repair*) よりも、聞き手行動を発揮して相手に働きかける反復や言い直し、言い換えのタイプを多用すると考えられる。これらは話し手聞き手双方にかかわるいわば大局的な影響といえる。

この間接的な影響に関する部分は、本論文で着目したい聞き手行動における言い淀みと合致する。ここで聞き手行動についてまとめておこう。通常、聞き手とは、話し手に対峙する立場において、発話を受け取る者としての聞き手という解釈が一般的である。聞き手の行う行動が聞き手行動であるが、こうした聞き手はいづちやうなづきによる反応や、視線、表情などで応える以外、実質的発話を行わない。

一方、こうした語りを聞く立場の聞き手に対して、語りの先を促す発話をおこなったり、中断した語りを話し手の代わりに提示したりして、実質的な発話をおこない、局所的には話し手になっている聞き手のタイプがある。こうした行動はどちらも聞き手行動であるが、前者は「聞き手の理解を表出する聞き手的行動」として、後者は「聞き手の理解を表出する話し手的行動」として区別してとらえる必要があるという (伝 2009)。

さらにこうした聞き手行動は関与する会話の進行の仕方によって影響をうける。話し手がほぼ立場的に聞き手よりも優勢であり、話し手の話順が確保されている対話では、話権を維持するために機能する言い淀みは最小限になるかもしれない。一方、より対等で、話し手と聞き手が協同的に作業する会話進行において、話し手と聞き手がおこなう言い淀みは話順交替のきっかけになりがちであろう。

この聞き手行動における考え方を援用すれば、言い淀みを含む発話を話し手への反応としてなされる「聞き手的行動タイプ」と話者交替を意図する「話

し手指向タイプ」とに分けた上で日英比較することが望ましいだろう。地図課題対話は、こうした両方のタイプが混在している対話進行といえる。おそらく、解決すべき問題が多くなると言い淀みが増えるだけではなく、話者交替も増えるだろう。そうなる聞き手行動タイプよりも話し手指向タイプの言い淀みが増えるのではないかと考えられる。その場合には、対話遂行上、どんな方略が働くのかを考察してみると興味深い。

3.1 対話データ

対話データとしては、地図課題対話による日本語と英語の平行コーパス各 8 対話が用意されている。地図課題は二人の実験参加者により共同で達成される課題である。二人の実験参加者に課される課題は、相手の地図が見えないように向かい合い、お互いに会話を交わしながら、情報提供者の地図上の経路を情報追従者の地図上に再現することである。なお、情報提供者の地図には経路以外に出発地点と目標地点、そしていくつかの目標物がえがかれている。一方、情報追従者の地図には、出発地点と目標物だけが描かれており、目標地点と経路は描かれていない。二つの地図は完全に同一ではなく、その違いについては課題の遂行過程で解決すべき問題の一つとされる。(詳細については吉田 2002 を参照)¹

3.2 分析方法

言い淀みはどの言語にも存在するが、非流暢性のタイプや頻度、その機能は言語によって少しずつ異なる (渡辺 2008)。たとえば、日本語のフィラーであるアノーやエートにあたる、英語の言い淀みには *filled pauses (um, uh)* をはじめ、*false start (go to the ... turn left)*、反復 (*go to to the left*)、ポーズや沈黙など多くの現象があるが、話し手のためらいを含むという点で共通する。こうした言い淀みは、話し手があからさまに自分の発言を修正するものではないが、一方で、もとの語句を言い直したり、別の表現に置き換えたり、反復される修正部分 (*repair*) の生起について、言語の文法体系の違いからくるパターンの

¹ Lickley and Bird (1998), Branigan, Lickley, and McKelvie (1999) では英語の非流暢性について HCRC で構築された名称を付した地図課題に基づくオリジナルの対話データを利用して分析している。非流暢性は地図課題に名称を付さない対話データのほうが頻度やタイプにおいて拡大すると考えられるので、日本語同様、独自に収集した対話データに基づく分析が必要である。

違いが分析の対象になることがある。たとえば、英語ではフィラー(*um, uh*)のほかに前置詞や冠詞があり、それぞれ言い淀みとして使用する傾向がある (Fox, Hayashi, and Jaspersen 1996)。

また、自分の発話における間違いを修正しようとする ‘self-repair’ については、発話者が単独で行う場合 (1) は話し手が自分の話権を維持する意図があるのに対して、対話の関与者が相互に行う場合 (2) では、聞き手行動において、話し手の発話を修正するために言い淀みが利用されており、repair が協同的に働いて、相手が話順をとる結果となっている。

(1)

come down until you're *two in- ...uh two to three inches above that*

(Lickley and Bard 1998)

F: やまがえやまじゃない

(dc.p.18)

(2)

F: でどこでとまればいい<290>*どしゃのみぎがわ

G: *えっと

G: どしゃの<270>ひだりっかわで

(dc.p.15)

どちらも言い淀み、‘uh’ 「え」 (1)、「えっと」 (2) をはさんで修正がなされているが、対話の場合、(2) の場合のように、言い淀みがきっかけとなった協同作業を通して修正がなされることが多い。

4. 検討すべき事例

この節では、「話し手指向タイプ」と「聞き手的行動タイプ」とに分けた上で日英比較を試みる。

4.1 話し手指向タイプの言い淀み

以下の発話はどちらも話し手指向の言い淀みを含む。

(3)

*TA 30 *I think... I think it's a village sort of like a couple of sort of makeshift buildings with sort of like a fire or something.*

*TB 31 *< {m erm} {a Th} There's a few different things but it's difficult to actually /*

(lleq4c1)

二人の対話者は発話の冒頭で反復やフィラーで話す意図を示しながら自分の話権を維持している。以下の例(4)では、話し手からの合図に対して、聞き手が

協同的に反応している。

(4)

G: で

G: もみのきの

G: まましたとはいきませんけどちょうどみぎはしぐらいに

G: なにかちよつと

G: なんだろ

F: がけ*みたいなやつ

G: *そがけみたいな

F: *があ

G: *ちよつとはいありますか

(dc. p8)

Giver の「なにかちよつと」「なんだろ」に続いて談話要素を導入しているのは Follower である。ここで、Follower は部分的に話し手としての役割を担いつつ、Giver へ話権を橋渡ししている。

4.2 聞き手的行動タイプの言い淀み

聞き手的行動タイプとして、(5) と (6) の例を見てみよう。

(5)

*TA 208: Right, okay. Have you got, {m erm} sort of a mountain.

*TB 209: {m mhmm} Can you describe the mountain?

*TA 210: {n laugh} {m erm}

*TB 211: < {m um} Okay I'll /

*TA 212: It's not... Have you got two mountains? >

*TB 213: I do.

(lleq4c1)

ここでは、TA の質問に対して TB は問い返している。この問い返しがきっかけとなって、両者の言い淀みの後、TA (212) は質問を変えている。(6)を見てみよう。

(6)

*TB 218: Okay, do I go to that?

*TA 219: < Yeah, go to that one. Sort of /

*TB 220: {m er} Underneath... the foot of?

*TA 221: Well, on my map, you come sort of, you've come below the house xxxxx

*TB 222: Right.

*TA 223: You've come below the house, right.

(lleq4c1)

ここではTAの指示(219)をややさえぎるようには確認しようと聞き返すTB(220)の発話があるが、このTBの聞き手行動は話し手にさらなる説明を要求しており、TBはその後同じ発話‘You've come below the house’を反復し、確認している。

(7)

G:でそのはん

G:えんをつかってえすができるようににしがわにすすんでください

G:ちょうどそのはんえんが

G:え

G:と

F:きたむきになるんですかさいごは

G:はんえんのふくらんでるほうはみなみむきになります

(ab)

ここでは話し手Gが発話途中で言い淀んでいる直後にの聞き手Fが質問を介入する。話順が一時的に聞き手Fに交代しているが、話し手Gはこの質問に対して応えることになる。

5. まとめ

本稿では、聞き手行動における考え方を援用して、言い淀みを含む発話を観察し、話し手への反応としてなされる「聞き手行動タイプ」と話者交替を意図する「話し手指向タイプ」とに分けた上で日英比較しつつ、対話遂行上、どんな方略として働いているか考察することを試みた。

その結果、話し手指向タイプの言い淀みは話権保持の傾向だけではなく、聞き手の反応を巻き込みながら対話進行することが読みとれ、聞き手の行動タイプの言い淀みは聞き手の立場からの質問や clarification が対話の進行に影響を与える傾向が見られた。さらに、聞き手は話権を取って、一時的に話し手役割を担うこともあるが、この話し手役割とは話権を占有するのではなく、むしろ本来の話し手をサポートし、話し手に有益な新たな情報提供をすることで協同的な性格をもつことが示唆される。

今回は日英比較の体系的な分析ができなかったことが反省点である。しかし、今後は、さらに多くの事例から共通する傾向や規則性を見だし、ここで議論した仮説が実証できるものかどうかについて検

討したい。

謝辞

本研究の一部は大和日英基金 (Ref: 7102/7524) の奨励助成およびグレイトブリテンササカワ財団(Ref: J590)のもとに行なった。

参考文献

- Arnold, Jennifer E. (2008) ‘Reference production: Production-internal and addressee-oriented processes,’ *Language and Cognitive Processes*, 23 (4), 495-527.
- Branigan, H., R. Lickley, and D. McKelvie (1999) Non-linguistic influences on rates of disfluency in spontaneous speech,’ *Proceedings of the 14th International Conference of Phonetic Sciences*.
- Brennan, S.E. and Clark, H.H. (1996) ‘Conceptual pacts and lexical choice in conversation,’ *Journal of Experimental Psychology: Learning, Memory, and Cognition*, 22 (6), 1482-1493.
- 伝康晴 (2009) 「聞き手行動の認知科学に必要なもの」『認知科学』16 (4), 475-480. (Dec.2009)
- Fox, B.A., M. Hayashi, and R. Jasperson (1996) Resources and repair: A cross-linguistic study of syntax and repair,’ In Ochs, E., E.A. Schegloff, and S. A. Thompson (Eds.) *Interaction and Grammar*, 185-237.
- Lickley, R. (2009) ‘Disfluency in Dialogue’ in *Joint Seminar for UK-Japan Map Task Dialogue Corpus Project: Exploring Features that are Significant but often Overlooked in Speech Communication* (an unpublished report) 6-11.
- Lickley R. J. and E.G. Bard (1998) ‘When can listeners detect disfluency in spontaneous speech?’ *Language and Speech*, 41(2), 203-226.
- 吉田悦子(2002)「日本語名称なし地図課題対話コーパスの概要と転記テキストの作成：報告」『人文論叢』第19号. 241-249.
- Yoshida, E. (2009) ‘Exploring How and Why Disfluency occurs in Dialogue?’ In *Proceedings of the 16th Tri-University International Joint Seminar and Symposium 2009* In CD-ROM.
- 吉田悦子・R. Lickley (2009)「対話におけるグラウンディング過程とは何か：談話指示と言い淀みの分析」『言語処理学会第15回年次大会発表論文集』426-429.
- 渡辺美知子 (2008)「話し言葉コーパスにおける言い淀み分布の定量的解析」『第2回博報「ことばと文化・教育」研究助成研究成果論文集』博報児童教育振興会 71-89.